

苦とともに生きる

- 人生の New vision をもとめて -

関西学院大学大学院総合政策研究科 大学院研究員 山本龍彦

はじめに

喜びは常にはかなく消え去る。だが、苦はいつも新しい。日々新たな苦が待ち受けているのが我々の一生である。人生の本質を苦であると見た仏陀の教えは、我々の生の実相を物語る。この根源的な苦の前には、文明の様々な利器も実はむなしい。医学の発達は相対的に我々を治療する。だが、それは病自体を、死そのものをなくしはしないのだ。生まれ、生き、老い、病み、死ぬという人生の本質は、新たな苦の連続である。苦こそ常に新しい。

西欧の科学技術文明は、歴史をリニアに直線的に発展するものと考え、文明の発達は人類の幸福を生み出すと考えた。しかし、古代中国の賢者は、^{いにしえ} ^{かんが} 古に稽みること、古きものに学ぶ稽古こそ、魂の平安につながると考えた。両者は、ベクトルが逆の方向を指向する。前者は、新しいことは発展であると考え、後者は逆に古きことのなかに完全性を見いだす。新しさの価値が西洋と東洋では逆転する。新しいことは良いことなのであろうか。

そして、その中間にある印度の哲人は、すべてのものの永劫回帰・輪廻を真理とした。未来を求める直線ではなく、過去を指向するその逆でもない。すべてが円運動として回帰する。新たなものも、古きものもともに苦であり、人はこの苦界を永久にさまよい続ける。では、新しいものなどないのだろうか。新しい何かは、我々に幸福をもたらさないのか。新しいことの意味とは。いや、新しいという何かは世界にはあるのだろうか。我々は、何かを新しくできるのだろうか。そして、それは我々に幸福をもたらすのだろうか……。

この小論は、この問題について比較思想的な立場から、人間の実存的な苦の止揚に取り組んだ法然の日本浄土教の思想を一方の基軸に、また一方で、我が関西学院の建学の精神である、Mastery for service の基底に存在する、キリスト教の隣人愛を比較考察しながら、そこに我々の人生に対処する新たな vision を求めてゆくものである。そこに浮上してくるもの……それは、洋の東西や歴史の新旧をこえた人類の本質であり永遠の真理である。

友の苦とともに歩む - 慈悲と隣人愛

人生は、新たな苦の連続である。もちろん、人生には喜びや楽しみもある。だが、喜びや楽しみは、それが喜びであり楽しみであるがゆえに、一瞬に消え去って過去のものとなる。道元のいうように、「花は哀惜に散り、草は棄嫌におふるのみなり」だからである。¹⁾ 我々は常に苦を意識し、苦と直面して生きざるをえない、というのが人生の実相なのである。

では、苦を免れる術^{すべ}があるのだろうか。人類の歴史は、その術^{すべ}を求め続けた歴史でもある。文明の発達、相対的に苦を免れるということには寄与してきた。それは生活を快適にし、利便性を増大させ、病気を治療し、飢餓をへらして対症療法的に苦を低減させた。だが、人生の本質は苦であるということに変わりはない。人類が月面に降り立とうとも、我々は病む。DNA がすべて解明されても人間は老いる、そして死ぬ。本質は変わらない。

仏教で苦を意味する、duhkha の kha とは車軸を意味し、接頭語の duh は不、あるいは悪であるから duhkha とは本来的には不安定、あるいは不運・悪運の車軸である。つまり、不安定な車軸という生の先験的条件のゆえに、その車に乗る者は、生・老・病・死という、不運・不安定から生じる苦を免れないのであり、またこの本質を見ることのできない、あるいは見ようとはしない、我々の根源的無知、すなわち無明という認識力の限界性がある。

その無明のサンスクリット語の原語は avidya であり、vidya は印欧語として英語の visual・vision につながる。そして、接頭語の a が vidya を否定するので無明とは、vision のなさ、見ること能わざるということになる。仏教のめざしたものは無明の克服であり、不安定不運な苦でしかない人生の本質をふまえた苦の止滅であるから、それは苦に対処する人生の new vision の探求と、その構築、そしてその実践であるとも表現できるのである。

だが、洋の東西を問わず、古代の聖賢の時代と遠く離れた我々は、もはや古^{いにしえ}に稽^{かんが}みる、つまり稽古^{いにしえ}ということは困難である。また、心をむなしくして神に祈ることも念仏を称えることも、ほとんどの現代人にはむずかしい。時機、つまり時代と社会状況が、古^{いにしえ}の宗教や思想と我々を疎外し、拒んでいるのである。では、時機相応の宗教や思想があるのだろうか。いや、すべてのものが永劫回帰する輪廻の現象ならば、新しいものなど決して現れてはこない。あるのはただ、永久にかかわらぬ人生の本質、苦に対する自分のあり方を、対処する姿勢を新たにすること、つまり人生の新たな vision を求めることだけなのである。

つまり我々は、人生そのものを変えることは出来ないが、それに対処してゆく vision を変えることで自らを新しくすることができ、それによって、絶対に免れることのできない苦とともに生きることが、新たな苦を友として歩むことが、できるようになるのである。

日本浄土教を創始した法然は、新たな仏教をつくりだしたのであろうか。否である。では、仏陀の時代の原始仏教の原点に帰ったのであろうか。これもまた否である。法然は、浄土教に仏教の新たな vision を見たのである。南無阿弥陀仏と称える称名念仏に時機相応、つまり当時の時代と社会状況に相応しい、仏教の行の新たなあり方を見いだしたのである。

当時のあいつぐ疫病と戦乱の世相の時代と社会に法然は末法を見、人間の苦とそれを生みだす人間の本質を見た。罪業凡夫の自覚であり、人間のおかれた生の実存的不条理の認識である。だが、末法だから罪業があるのではない。凡夫だから苦があるのではない。縁起という、現象の相互依存性の世界に人間は存在しながら、その相互依存性にもかかわらず我々はその自己中心性の根底にある無明と渴愛ゆえに他の有情、つまり人間を含めたすべての生命を損なわずには、一瞬たりとも生きてはゆけないという、生存の条件と状況が罪業であり、誰一人この枠から一步もぬけだせないがゆえに我々すべてが凡夫なのである。

この自覚から慈悲が生まれる。慈悲とは何か。慈悲の慈は原語のサンスクリットでは、maitri(マイトリー、音写してミロク=弥勒)であり友、そして友愛を意味する。そして悲は karuna(カルナー)共苦、同情を意味する。つまり慈悲とは友への友愛、そして友の苦をともにすること、すなわち共の苦を分かちあい、支えあって歩み、生きることを意味する。²⁾

四国を遍路する巡礼者は、その杖に同行二人と記している。この同行とは、弘法大師を意味する。かつての困難に満ちた遍路道を彼らは、自らの内なる、信仰の対象たる弘法大師とともに歩むことでその困難を克服した。同様に我々もまた、家族や友人と支えあうことで、この苦に満ちた人生を歩んでいるのである。人という文字は、人間が大地に立っている形を表した象形文字である。そして、その人が歩む姿が行という漢字を形成している。

我々は大地に立ち、そして歩む。だが、その道は決して平坦ではない。むしろ、隘路や悪路の連続であり、我々自身もまた、その歩みに病み悩み傷つく。そして、その苦を分かちあう行為は、その苦の本質の自覚から生まれる。この時点で我々は、聖書の「良きサマリア人の譬え」を想起する。傷ついたユダヤ人を助けたサマリア人は、立場の違いや属性、あるいは世俗の規範をこえて、そのユダヤ人の苦の中に自らもまた避けることのできない苦とその本質を見、友として人生で邂逅したとなり人、隣人としてその苦を分かちあったのだ。そして、この地平で慈悲と隣人愛は、東西の叡智はその最深層部において頷きあう。

自己中心性の克服 - 菩薩行と Mastery for service

サマリア人の行為はまた、自己中心性を生みだしている無明と渴愛の克服から生まれる。自己中心性の克服をユング心理学的に表現すれば、ego から self への心的状態の移行であり、個性化・自己実現へのプロセスである。³⁾ そして、この考え方から浄土教の称名念仏を照射するとき、同じ構造が新たに浮上してくる。何千回、何万回と南無阿弥陀仏と称えるとき、つまり念仏に集中するとき、自己中心的な思いはからい、つまり欲望に拘束された自我が崩壊し、そこに真性の自己が浮上してくると考えられる。念仏に con - centrate(集中・三昧)することによって、その自己中心性から離脱した ex - centric な状態が生まれるのだ。

では浄土教では、なにゆえに南無阿弥陀仏と称えるのか。南無とはサンスクリットの nama、つまり名前という語であり、転じて帰依という意味にも使われる。名前は神聖なものであり、その名前を知り称えることは、その名前の存在との一体化を意味する。そして、阿弥陀仏には二つの意味がある。無量の光を意味する Amitabha(アミターバ)と無量の生命を意味する Amitayus(アミターユス)であり、仏とは Buddha(目覚めた人)の意である。

無量の光とは、無限の空間である。無量の生命とは、無限の時間である。仏とは、その無限の空間と無限の時間の交錯する一点に存在する、光と生命を自覚した存在である。南無とはその存在への帰依、つまり一体化である。無限の光と生命の連鎖関係、相互依存性の中にある、生きている、また生かされている、至高の存在である阿弥陀仏と自己の一体化の自覚である。そして、自覚とは vision をつねに更新して新たにすることにつながる。

その新たな vision は我々に新たな生き方を要求し、また可能にする。この地点における

我々は、その始源からの無限の時間と空間における、すべての有情(生命)、あらゆる現象の相互依存性によって成りたっている、ここにいる「私」という存在と、その相互依存性を自覚し、またその vision に目覚めた存在となる。つまり、私はまた、あなたでもあるのだ。

それはまた、相互依存性でしか成立しない人類の、いやすべての生命体の共同性のベクトルを更新させ、その相依性を止揚してゆくことであり、それはまた至高の叡智の希求と実践となってゆく。ここに大乘仏教の叡智の結晶たる菩薩が誕生し、その上求菩提下化衆生の自利利他一致した行と、Mastery for service の祈りと実践が二重写しに見えてくる。

上求菩提下化衆生とは、究極の解脱を希求して精進しつつも、そのプロセスごとに得た叡智を衆生に供して回向することである。つまり、菩薩とは衆生に奉仕するために自らを高める存在であり、視点をかえれば Mastery for service そのものに見えてくるのである。

慈悲と隣人愛、そして菩薩行と Mastery for service は、その最奥部で通底しているのである。なぜならそれは、新しさや古さではなく、人類共通の普遍的本質であり真理だからである。そして我々にできることとは、この普遍的本質・真理に新たな「知」の光を照射させて、そこに自らの新たな vision を発見し、それを日々実践してゆくことなのである。

我々は、互いに支えあい苦を分かちあうことで、その不可避の苦とともに歩む。いや苦を友にして生きる。人生自体は変えられないかも知れないが、我々はその vision を変え、新たにすることで苦に対処する姿勢を変えることはできる。この地平に心のアメニティ、魂の^{きょうあん}軽安が生まれる。仏教のタームで言う「抜苦与楽」である。そして、自らの苦を抜くことは不可能でも、友の苦を分かちあうことで、その苦を軽減させようと努力することは可能だ。そして、そのために自らを高めることこそ Mastery for service の実践であろう。

終わりに

生・老・病・死という人生における不可避の現象的苦を媒介に、その苦の本質を人間に先験的に付与された生存条件の不条理性にあると考えた仏教は、まさしく苦の現象学であったと現代では考えられる。そして法然浄土教は、仏を表象する念仏から、名号を称えることで、その仏と一体化し、人間の心的変容をうながすことを、末法期という時機相応の仏道修行の実践行として新たにとらえなおすことで、鎌倉新仏教のパイオニアとなった。

法然には新たな仏教を起こすつもりはなかった。だが、結果として彼はその時代に相応しい仏教の新たなあり方、new vision を見いだした。仏陀が見たもの、法然が見いだしたものは、決して新しいものではないと彼らも明言している。つまり新しさとは、人間の本质と真理を再発見し、それに新たな vision を与え、それを実践することにこそあったのだ。

註記

- 1) 花は、それを哀惜するがゆえに、散ることに目がゆくが雑草は嫌うがゆえにその存在が目立つのである。
- 2) 厳密には mitri は友愛、mitra が友の意となる。中国で音写されて弥勒となる。弥勒菩薩とは友愛菩薩。
- 3) 目幸黙遷他『仏教とユング心理学』森 文彦訳 春秋社 1985 年 233 頁 自我の心的重心が取り下げられ、自我の中心を超え出た心的状態が現出することによって、個性化・自己実現へとつながってゆくのである。

参考文献

- 大橋俊雄編『法然 一遍 日本思想大系 10』岩波書店 1971 年
関根他編『聖書』岩波書店 1965 年
多屋他『仏教学辞典』法蔵館 1995 年
辻 直四郎『サンスクリット文法』岩波書店 1974 年
道元『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記 日本古典文学大系』岩波書店 1965 年
中村 元『インド人の思惟方法』春秋社 1987 年
八木誠一『キリスト教は信じうるか』講談社 1970 年